

言葉の不思議

寺田寅彦

青空文庫

「鉄塔」第一号所載木村房吉きむらふさきち氏の「ほとけ」の中に、自分が先年「思想」に書いた言語の統計的研究方法（万華鏡まんげきよう所載）に関する論文のことが引き合いに出っていたので、これを機縁にして思いついた事を少し書いてみる。

「わらふ」と laugh ^{*} についてもいろいろなおもしろい事実がある。 laugh 𐌆 (AS.)hlehan から出たことになっているらしいが、この最初の h がとれて英語やドイツ語になり、その h が「は」になり、それから「わ」になったと仮定するとどうやら日本語の「笑ふ」

になりそうである。ギリシアの *galao* も *g* が *g_h* になり、それから *g* がとれて、「は」「わ」と変わればやはり日本語になるからおもしろい。(L.)rideo, (Fr.)rire は少しちがうが「ら」行であるだけにはたしかである。「げらげら笑ふ」「へらへら笑ふ」というから *g_h* や *h_h* のような組み合わせは全く擬音的かもしれない。マレイの *glak* も同様である。馬の笑うのは *ilai* でこれは日本に近い。「あざ笑ふ」の「あさ」は「あさみ笑ふ」の「あさ」かと思うがこれは (Skt.) *has* に通じる。一人称単数現在なら *hasami* だからよく似ている。[*ha_sita*] は笑うべき事で「はしたない」に通じる。「はしやぐ」が笑い騒ぐ事で、「あさましい」も場合によると「笑ひ事」であるのもおもしろい。

セミティックの方面でも (Ar.)basama は「微笑する」で「あさむ」 「あさましい」と似ている。しかし「笑ふ」の dahika はむしろ「たはけ」に似ている。(Ar.)faraha は「喜ぶ」で「わらぶ」に似ている。

「あさましい」はまた (Skt.)vismayas で「驚く」ほうにも通じるが、それよりも元の smi, smaya で微笑にもなる。

(Skt.)garh は非難するほうだが軽蔑^{けいべつ}して笑うほうにもなりうるのである。これも garh である。そう言えば「愚弄^{ぐろう}」もやはり garh だから妙である。

「べらぼう」も引き合いに出したが、これについて手近なものは [(Skt.)prabhu] また parama でいずれも「べらぼう」の意がな

くはない。しかしまた、「強い」ほうの意味の *bala* から出た *balavat* だつて似ていなくはない。「珍しい」「前例のない」ほうの [apra_pya, apurva] でも、やはり日本式ローマ字で書くと p+r+b(m) の部類にはいる。これらはサンスクリトとしてはきわめて明白に、それぞれ全く異なる根幹から生じたものであるのに、音のほうではどこか共通なものがあり、同時に意味のほうにも共通なものがあるから全く不思議な事実である。

英語の *brave* や *bravo* も「べらぼう」の従兄弟であるが、これはたぶん (L.)*barbarus* と関係があるという説がある。そうとすればギリシアの *Barbaros* とも共通に、外国人を軽蔑けいべつしているときの名であつたらしい。しかし「勇敢」では少しぐあいが悪い。ま

た一方で Barbarossa が「赤ひげ」であるのも不思議である。

[(Ar.)gharib, ghuraba_] 「異常」は喉音こうおんの g をとると「わらぶ」にも似てるし、h を b に変えると「べらぼう」のほうに近づく。すると結局「わらぶ」と「べらぼう」も従兄弟だか再従兄弟またいとこだかわからなくなるところに興味がある。ついでに [(Skt.)ullasita_] が「うれしい」で (L.)jocus が「茶化す」に通じるのもおもしろい。

barbarus で思いだすのは「野蛮」と (Skt.)yavana である。後者は、ギリシア人 (Ionian) であったのが後には一般外国人、あるいは回教徒の意に用いられ、ちょうどギリシア人の barbaros に相

当するものになっているからおもしろい。東夷とうい南蛮の類であり、
毛唐けとうじん人の仲間である。この「ヤワナ」が「野蛮」に通じまた
「野暮やぼな」に通ずるところに妙味がないとは言われない。

またこの「毛唐」がギリシアの「海の化けもの」〔*ketos*〕に
通じ、「けだもの」、「気疎けうとい」にも縁がなくはない。

話は変わるが二三日前若い人たちと夕食をくったとき「スキ焼
き」の語原だと言って某新聞に載っていた記事が話題にのぼった。
維新前牛肉など食うのは禁物であるからこつそり畑へ出てたき火
をする。そうして肉片を鋤すきの鉄板上に載せたのを火上にかざし、
じわじわ焼いて食ったというのである。こういうあんまりうま過

ぎるのはたいていいうそに決まっていると言つて皆で笑つた。そのときの一説に「すき」は steak だろうというのがあつた。日本人は子音の重なるのは不得意だから st が s になることは可能である。漆喰^{しっくい}が stucco と兄弟だとすると、この説にも一顧の価値があるかもしれない。ついでに (Skt.) jval は「燃える」である。

「じわりじわり」に通じる。

なすの「しぎ焼き」の「しぎ」にもいろいろこじつけがあるが、「しき」と変えてみると、結局「すき」と同じでないかという疑いが起こる。

steak はアイスランド語の steik と親類らしいが「ひたきのおきな」の「ひたき」を「したき」となまると似て来るからおも

しろい。「焚^た」くは (Skt.)dāh に通ずるがこのほうはよほどもつともらしい。(Ice)steik は steka と親類で英語の stick すなわちステッキと関係があり、串^{くし}に刺して火にあぶる「串焼き」であつたらしい。このステッキがドイツの stechen につながるとすると今度は「突く」「つつく」が steik に近づいて来るし、また後者と「鋤^すく」ともおのずからいくぶんの縁故を生じて来るのである。

こんな物ずきな比較は現在の言語学の領域とは没交渉な仕事である。しかし上述のいろいろな不思議な事実はやはり不思議な事実であつてその事実は科学的説明を要求する。どれもこれもことごとく偶然の現象だとして片付ける前にもかくも何かしら合理

的な方法のふるいにかけて吟味しなければならない。しかし従来のように言語の進化をただ一次的、線的のもののように考えるあまりに単純な基礎仮定から出発した言語学ではこの問題は説明される見込みはない。たとえば自分がかつて提議したような統計的方法でも、少なくとも一つの試みとして試みなければならぬと思う。上記の諸例はそういう方法を試みるであろう場合に必要ならぬ非常に多量な材料の中の二三の例として数えられるべきものであろうと思う。

もし許さるるならば、時々こういう材料の断片を当誌の余白を借りて後日のために記録しておきたいと思う。

(昭和七年十二月、鉄塔)

二

いかりいかり
錨いかりと怒いかり、いずれも「イカリ」である。ところが英語の anchor と anger が、日本人から見ればやはり互いに似ている。「アンカー」と「アンガー」である。

anchor はラチンの anchara でまたギリシアのアンキユラで「曲がった鈎かぎ」であり、従ってまた英の angle とも関係しているらしい。ペルシアでは [la₋ngar] である。サンスクリトの [la₋ngal a] は鋤すきであるがしかし錨いかりのような意味もあるらしい。同時に embrum virile の意味もある。ロシアの錨はヤーコリである。こう

なるとよほど日本語に接近する。「イカリ」はまた「いくり」にも似ている。

angerはアイスランドの [aŋgr] やIの angorなどのような「憂苦」を意味する言葉と関係があるようで、一方ではまたスウェーデンの「悔恨」を意味する [aŋgr] に通ずる。このオンゲルは「オコル」に似ている。

怒りを意味する cholera はギリシアの胆たんじゆう汁じゆうのコレーから来ているようで、コレラや gall や yellow など縁があるようである。イカリのイが単に発語だと仮定するとこれがやはり似通にかよつて来るからおもしろい。ギリシアのカレポス、オルギロス、アグリオスいずれにしても k または g の次に l または r の音がつづいて来る

のがおもしろい。

ロシアではgがhに通ずる。日本ではhがfに通ずる。それでgrの代わりにfrを取ってみると英国の激怒fury, Lのfuria, fureeに對する。

九州へんではdがrに通ずる。そこで、grの代わりにgdを取ってみると、アラビアの動詞ghadiba（怒り）の中に見いだされる。この最後のbaは時によりただのbによつて響きを失うことはあるのである。

名古屋^{なごや}へんの言葉で怒ることをグザルというそうであるが、マレイではgusariとなっている。土佐^{とさ}の一部では子供がふきげんでguzu-guzuいうのをグジレルと言ひ、またグジクルという。アラ

ピアでは「ひどく怒らせる」が [gha₂za] である。

ロシアの「怒り」griev はギリシアの動詞 aganaktein の頭部に似ている。古事記の「いづのふ」にも似ている。gn をロシア流に hn にする一方で、「忿怒^{ふんぬ}」から「心」を取り去って、呉音で読めば hnn である。

英語の gnarl は「うなる」に通じる。「がなる」にも通じる。

英語の vex は L の uehere に関係し「運搬」の意がありサンスクリトの vah から来たとある。日本でもオコルとオクルが似ているのと相対しておもしろい。h は往々 k h また k に通じるから uehere ヲ ukoru とはそれほど遠く離れていないのである。weigh もやはり縁があるとの事である。vah は「負う」に通じる。

腹を立てる、腹立つというのはあて字であろうと思われる。サンスクリトの *krudhyati* の *k* を *h* で置き換えることもかくも *hrdt* という音列を得られる。これを *haradati* の子音と比べると同一である。偶然とするとかなり公算の少ない場合の一致である。ロシアの *serdit* もやはりいくらか似ているのである。苛立いらだつが *irritate* (*L. irritare*) に似ていることは明白である。

「あらぶる神」の「アラブル」が *L* に *rabere = to rage* に似ていることも事実である。

「床屋」が何ゆえに理髪師であるか不思議である。「髪結床」かみゆいどこ から来たかと思われる。その「床」がわからない。

マレイ語で頭髪を剃るのは *chukor* であり女の髪を剃るのが *tok ong* である。また蘭領らんりょう インドでは「店」が *toko* である。

マレイの理髪師は *tukang chukor* また *tukang gunting* である。アラビアでは「店」が *dukkān*, ペルシアでも *dukan* である。ペルシアの床屋さんは *dallak* である。

ギリシアで剃るのは *xurein* でわが *suri* に通じる。髪を切る意味の *cheirein* は「切る」「刈る」に通じる。

Skt. kshura は剃刀かみそり。 *krit* は切るであるとすると思議はない。

おもしろいことは、土佐で自分の子供の時代に、紙鳶たこの競揚をやる際に、敵の紙鳶糸を切る目的で、自分の糸の途中に木の枝へ剃刀の刃をつけたものを取り付ける。この刃物を「シューライ」

と名づける。これは前記のサンスクリトの「クシユーラ」とよく似ている。これはたしかに不思議である。

床屋も不思議だがハタゴヤもなぜ旅館だかわからない。

ギリシアの宿屋が *pandocheion* でいくらか似ているのはおもしろい。パドケヤとハタゴヤである。 *pan* と *dechomai*, すなわちだれでも接待する意だそうである。衆生を濟度する仏がホトケであるのは偶然の洒落しやれである。

ラテンで「あるいはAあるいはB」という場合に *alius A, alius B* とか、 *alias A, alias B* とか、 また *vel A, vel B* とふう。 *alius* と *ve* とは別物であるのに、どちらも日本の「アル」に似ているから

おもしろい。英語の *or* でも少しは似ている。Skt. の「または」
「あるいは」は *athawa* である。

ロシアで「すなわち」というような意味で、*znatchiu* を使う。
日本の *snati* と似ている。

また *tak kak* というのがいろいろの意味に使われるが *whereas*
の意味では、「それはそうととにかく」の「兎角」とかくに通じなくな
い。うさぎ兎の角ではどうにも手に合わない。

ドイツの *noch*(=*nun auch*) が日本語の *naho* に似ている。イタリ
アの *eppure* は日本の「ヤッパリ」と同意義である。

因果関係はわからなくても似ているという事実はやはり事実である。

ことばの事実を拾い集めるのが言葉の科学への第一歩である。玉と石とを区別する前には、石も一応採集して吟味しなければならぬ。石を恐れて手を出さなければ玉は永久に手に入らない。

(昭和八年四月、鉄塔)

三

春(ハル)のラテン語が *ver* であるが、ポルトガル語の [vera

ō) は夏である。ペルシアの春は [bahar] , 蒙古(カルカ)語(もっご)では habor である。ドイツ語の [Fru:hlīng] は [fru:h] から来たとすればこれは f と r である。かなで書くとみんなハ行とラ行と結びついている点に興味がある。アイヌ語の春「パイカラ」はだいぶちがうが、しかし p を b に、k を h に代えたとおのずからペルシアの春に接近する。この置き換えは無理ではない。「張る」「ふえる」「腫るる」など h または f に r の結合したものである。full, voll, πλύνω などとも連想される。

夏(ナツ)と熱(ネツ)とはいずれも n と t の結合である。現代のシナ音では、熱は ㄛ の第四声である。「如」がジョでありニョであり、また「然」がゼンでありまたネンであると同じわけ

である。蒙古語もうこうごの夏は [ju:n] である。朝鮮語ちようせんごの「ナツ」は昼である。しかし朝鮮語で夏を意味する言葉は「ヨールム」で熱がヨールである。yをjに、語尾のrをtにすると（この置き換えもそれほど無理ではない）シナの現代音になる。ハンガリーの夏は [nyar]（ニヤール）。コクネー英語で hot は ot であるがこれは日本語の「アツ」に似ている。フランスの夏が [ete] であるのもおもしろい。アイヌの夏 sak は以上とは仲間はずれであるが、しかしアラビアの saif に少し似ているのがおもしろい。語尾の k は 𐌺 から h になる可能性があり、日本では h が f になるのである。

秋（アキ）は「飽く」や「赤」と関係があるとの説もあるよう

であるが確証はないらしい。英語の autumn が「集む」と似ているのはおもしろい。これはラテンの autumnus から来たのに相違ないが、このラテン語は augeo から来たとの説もある。この aug がアキとは少し似ている。「あげる」「大きい」なども連想される。秋（シユウ）が現在の日本流では、「収」「聚」と同音である。冬（フユ）は「冷ゆ」に通じ「氷」に通じスル※レ（雪）にも通じる。露語の zima は霜（シモ）や寒（サム）や梵語の hima（雪）やラテンの hiems（冬）やギリシアの cheimon（冬）やまたペルシア語の sarmai（寒い）にも似ている。フィンランド語の kuura（霜）は日本の「こほり」の音便読みに近い。英語の cold は冷肉（コールミート）のコールである。氷こおるに近い。朝鮮語で

冬は「キョーウル」である。ヘブライ語の寒さも「コール」である。

Winter は日本語の「いてる」とどこか似ているとも言われよう。

フランス語の冬 *hiver* はラテンの *hibernum* であろうがこれを「冷える」と比べてみるのも一興である。

日本の山には「何々やま」と「何々だけ」とがある。アラビアの山 *jabal* ペルシアの山 *jebel* は一見「ヤマ」と縁が遠いようであるが *j* が *y* になり *b* が *m* になる例は多いようであるから、それほど無関係ではない。(邪はジャでありヤである。馬はバでありマ

である)

トルコ語の山 dagh は「だけ」に似ている。アジア中部には tag
 のついた山がいろいろある。ターグは「たうげ」に似ている。
 ドイツ語の屋根 Dach は上記の dagh に通じる。「棟」が「峰」
 に通ずるのと類する。

アイヌの「ヌプリ」は「登り」に通じ、山頂を意味する「タプ
 カ」も「峠(タウゲ)」に少し似ている。峠が「たむけ」の音便
 だとの説は受け取れない。

山(シヤン、サン)の仲間はちよつと見当たらないが、しかし
 アイヌの「シン」は地や陸を意味すると同時にまた「山地」(平
 地に対する)をも意味するそうである。これに多数を意味する接

尾音をつけた「シンヌ」はたくさんな山地でこれが「信濃しなの」に似るなどちよつとおもしろいお慰みである。

アイヌ語「シリ」はいろいろの意味があるがその中で陸地を意味する場合もある。またこれに他の語が結びついた時には「シリ」が山を意味する事もあるらしい。この「シリ」が梵語ほんごの山「ギリ」に通じる可能性がある。

この「ギリ」は露語の「ゴーラ」に縁がありそうに見える。箱は根こねの強羅ごうらを思い出させる。また信州しんしゅうに「ゴーロ」という山名があり、高井富士たかいふじの一部にも「ゴーロ」という地名がある。上田うえだ地方方言で「ゴーロ」は石地の意だそうである。土佐の山にも「ナカギリ」という地名がある。

日本の山名に「カラ」「クラ」のついたのの多い事を注意すべきである。「丘陵」もkとrである。

一方ではまた露語でgがhに代用されまた時にvのように発音されることから見ると、フィン語の山 *vuori* やチェツク語の *hora* が同じものになるし、hが消えたりvが母音化するとギリシアの *oro* や蒙古（もうちこ）の *oola* も一つになって来る。またヘブライの山 *har* も親類になって来るから妙である。

ドイツの *Berg* はだいぶちがうが、しかしgを流動的にし、bをvにすればフィン語に接近し、bを唇（しんおん）音のmへ導けばタミール語の *malai* に似て来る。後者は「盛り土」の「盛り」に似る。日本で山の名に「モリ」の多いのが、みんな「森」の意だかどう

かわからない。

ラテン系の *mons, monte, montagne, mountain* 等は明白な一群を形成していて上記とは縁が遠く見える。これに似た日本語はちよつと思ひ出せない。無理に持つて来れば 饅頭まんじゅうが mound に似ている、これはおかしい。

ハンガリア語の山 *hegy* (ハヂ) が「飛騨ひだ」に似ているのが妙である。この *g* はむしろ *d* に似た音であるから。日本語「ひたを」は小山の意である。

ペルシア語の小山 *kuh* (クフ) は「丘きゆう」や「岡こう」に縁がある。アイヌの「コム」もやや似ている。この「コム」は小山であり、また瘤こぶである。すなわち *m* を *b* に代えたのが日本語の「こぶ」で

ある。これと多少の縁のあるのが英語の knob, hump, hummock, ドイツの Knopf, Knauf などである。その他「瘤」の仲間にはマレイの gmbal, ロシアの gorb, スルーの kuhan, ハンガリアの [gomb, csomo] 等である。

オロチは「丘の霊」だとの説がある。「オ」は「丘」で「ロ」は接尾語だということである。この「オロ」がギリシア語や蒙古語（こくろ）の山とそっくりなのがおもしろい。

「ムレ」は山の古語だそうであるが、これは上記タミール語の malai に少し似ている。朝鮮のモイよりもこのほうが近い。また前述の理由からドイツ語やフィン語とも音声的に縁がある。

毎回断っているとおり、相似の事実を指摘するだけで、なら

の因果関係を付会するつもりはないから誤解のないように願いたい。

(昭和八年七月、鉄塔)

四

「ウミ」(海)のヘブライ語が「ya^hm」である。「ヨミノクニ」は黄泉でもあるがまた「海」だとの説もあつたように思う。この「ヤーム」が「ウミ」よりもむしろ「ヤマ」に似ているのがおもしろい。西グリーンランドのエスキモーの言葉 imaq は海で imeq は水である。q はいろいろに変化するから ima, ime が「ウミ」であ

り水である。英語の humid (水けある) の終わりの d をとれば「ウミ」に近くなり、第二綴字^{てっじ}だけだと「ミツ」になる。

英の sea はチユートンの [sæ&] から来たとある。saiwiz も連関している。これが「ウシホ」(ウシオ)の「シオ」と少しは似ている。

「ワダツミ」「ワダノハラ」の「ワダ」は water や露の voda やその他同類の水を意味する言葉と類し、また「ワタル」という意味の wade(L. vadere) および関係の諸語と似ている。梵語^{ぼんご} udadhi (海) が単数四格で終わりに m がつけば「ワダツミ」に近づく。「オキ」(沖) はギリシア「オーケアノス」の頭部に似る。「カタ」(瀉) はタミール語の海 kadal に近く。

朝鮮のパーターはやはり「ワタ」の群に入れ得られよう。

「ナダ」は梵語の川 *nadi* に似ている。

「カハ」（川、河、カワ）は「河」^ホと実際に縁がありそうである。その他にはシンハリースの *ganga*（川）とわずかばかり似るだけで、他にちよつと相手が見つからない。

「ナガレ」はもちろん「流れ」であるが、ある人の話では「ナガ」は「長」で「ルル」が「流」であろうとの事である。これを「リウ」と読むとギリシアの「レオ」（流れる）と近い。

トルコの「ネフル *nehir*」（川）は *h* を例の *g* にすると、「ナガレ」に近よる。

朝鮮の「ナイ」（川）とアイヌの「ナイ」（川、谷）はそっくりであることから見ると日本内地でも同じ言葉で川を意味する地名がありそうに思う。

土佐に奈半利川なはりと伊尾木川いおきとが並んでいる。おもしろいことは、アラビア語の川は「ナフル」、ヘブライのが「ナハル」「ナール」等。フィン語の川は *yoki* 「ヨキ」である。もちろん、直接の縁があらうとは思われぬ。また上記の川名も川の名が先か土地の名が先か、それもわからない。「なばりの山」もあるから朝鮮の「ムール」は蒙古語もうこごらしい。カルカ語の川は [mu:re:n] である。

人間の頭部「かうべ」「くび」に連関して「かぶと」「かむり

(冠)」「かぶり」「かぶ(株)」「かぶ(頭)」「くぶ(くぶ

つち)」「こぶ(瘤)」「かぶら(蕪菁)またかぶ」「かぶら

(鏝)」「こむら(腓)」「こむら(樾)」などが連想される。

これに対して想起される外国語ではまず英語でもあり、ラテンの

語根でもあるところの cap がある。青森あおもりの一地方の方言では頭

が「がつぺ」である。ラテンの caput は兜かぶととほぼ同音である。独

語の Kopf, Haupt も同類と考えられる。ギリシアの κεφαλη※

、マレイの kpala は「かむり」「かぶり」の類である。

和名鈔わみょうしやうには「顛ろ和名加わみょうか之良しらの乃加のか波長はら 脳蓋也のうがいなり」とある

それで「カハラ」は頭の事である。ギリシアやマレイとほとんど

同一である。

アラビアの頭骨 qahfun は「カフフ」で「かうべ」に近い。

英語の円頂閣 cupola はラテンの cupa (樽^{たる}) から来たそうであるが、現在の流義では同一群に属する。

英語の head はチュートン系の haubd といったような語から来ているが、音韻法則によると L のカプトとは別だそうである。しかしこの「ハウプト」は、そんな方則を無視するここの流義では、やはり兜の組である。

頭部を「つむり」とも言う。これは L の tumuli (堆土^{たいど}) と同音である。cumuli (積雲) は「かむり」のほうである。

「あたま」も頭部である。梵語^{ぼんご} [a₁man] は「精神」であり

「自己」である。「たま」は top に通じる。

敵の首級を獲ることを「しるしをあげる」と言う。「しるし」が頭のことだとすると、これは梵語の *siras* (頭)、*sirsham* (頭) に似ている。

八頭の大蛇だいじやを「ヤマタノオロチ」という。この「マタ」が頭を意味するとすると、これはベンガリ語の *[ma_theta]* (頭) やグジャラチの *[ma_thoon]* やヒンドスタニ語の *mund* に縁がある。これが子音転換すれば「タマ」になる。

髑髏どくろを「されかうべ」と言う。この「され」は「曝れさ」かもしれないが、ペルシア語の *sar* は頭である。

「唐児からこわけ」を「からわ」という。日本紀にほんぎに角子を「あげまきか

らわ」と訓してあるそうで、もしかすると「からわ」また「からは」は初めには頭を意味したかもしれない。とにかくロシアの *olova, glava* (セルボ・クロアチアも同じ)、チェツコの *hlava*, スーアの *inhloko* (*in* は接頭語) 等いずれも「カラワ」と音が近い。

またこれらは子音転換によれば前述の *kh r* の群になるのである。

冠かんむりの「イソ」というのは俚言集覧りげんしゅうらんには「額より頭上をおおう所を言う」とあるが、シンハリス語の *isa* は頭である。ハンガリアでは *esz* がそうである。もつとも「イソ」はまた冠の縁や楽器の縁辺でもある。海の縁でもあるから、頭と比較するのは無理かもしれない。しかし「上」は「ほとり」と訓よまれることがあ

るのである。

「かうべ」の群中へ、かりに「神」^{かみ}と「上」^{かみ}も「髪」^{かみ}も入れておく。

朝鮮語「モーリ（頭）」は「つむり」の「むり」と比較される。

「つ」はわからない。蒙古^{もうこ}カルカ語の tologai はタミール語の

[talai:] に通じる。

「かしら」に似たものがちよつと見つからなかった。ところが L の capillus はもとは cap（頭）の dim. だそうで caput や、ギリシアの「ケフアレ」も同じものである。そうして、この「カピラ」は「毛髪」の意に使われている。これが「カヒラ」を経て「カシラ」になりうるのである。言海によると「カシラ」は「髪」の意

にも使われているからちようど勘定が合うのである。そうすると「かしら」も結局「かむり」「かぶり」の群に属する。

(昭和八年八月、鉄塔)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第七卷」岩波書店

1961（昭和36）年4月7日第1刷発行

初出：「鉄塔」

1932（昭和7）年12月1日

1933（昭和8）年4月1日、7月1日、8月1日

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Cyobirin

校正：松永正敏

2006年7月13日作成

2012年6月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

言葉の不思議

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>